

がんの父癒やした湯治宿

息子夫婦脱サラ三朝に開業

米子市出身の男性とその妻が8月、三朝温泉街(三朝町)に湯治宿「ゆのか」を開いた。がんを患い、余命半年ほどと宣告された父が療養で滞在したことがきっかけで泉質にほれ込み、脱サラして開業した。「様々な病気で苦しむ人たちに、温泉の良さに触れてもらいたい」と話している。

(浜畑知之)



岩盤浴の魅力語る田村さん夫婦(三朝町三朝で)

木造旅館改装 療養しやすい和室に

田村博文さん(57)と万里子さん(55)夫婦。2000年まで旅館として使われていた木造2階建ての建物を改装し、開業した。

貸し切り制の風呂二つのほか、岩盤浴の部屋がある。三朝の「最古の湯」ともいわれる公衆浴場「株湯」から引いた湯を、室内で流して気化したラドンを充填させており、風呂に入れない人も、横になっているだけで入浴効果が得られるという。「室温を30〜40度程度と通常より少し低めにし、長時間過ごしてもらいやすくした」と博文さん。

客室10室は和室で、ベッドを入れて療養しやすい造りにした。白炊ができる共同の台所もある。1泊4500円からで、岩盤浴は日帰り利用(4時間1000円)もできる。給食センターの調理員の経験を持つ万里子さんが、地元産の野菜や肉などを使って作る昼食を提供するカフェも併設している。

博文さんの父・浩さん(2006年に71歳で死去)は04年7月、胆管がんの手術を受けた。術後は体力が衰え、玄関のわずかな段差も、壁に手を当てて体を支えなければ上がれなくな

「年越しは難しい」と医師に告げられた後、友人の勧めで三朝温泉に1週間滞在。軽快な足取りで帰宅し、博文さんを驚かせた。その後毎月、1週間ほど三朝温泉で湯治をするようになり医師の宣告を大きく上回る2年を生き永らえた。

博文さんは当時、県内の有線放送会社で映像制作の仕事をしていて、「県内に任んでいながら、温泉の癒やしの効果を知らなかった」と感じ、湯治宿の経営を考えるようになった。

会社を辞め、貯金をはたいて準備。三朝温泉の湯と、県西部の方言で「ゆったり」を意味する「のっかり」を掛けて「ゆのか」と名付けた。口コミで人気が広がり、北海道から訪れる人もいる。三朝温泉は年間35万人前後が利用し、うち、湯治客は約2万人。温泉街には湯治客を受け入れる宿泊施設が約20軒あるが、昔ながらの湯治宿を、他地域出身の人が開業するのは珍しい。

博文さんは「お客さんの体調がよくなるのを見るのがうれしい。喜んでもらえる仕事に、この上ないやりがいを感じている」。万里子さんも「病気の人が安らげる場になりたい」と話している。